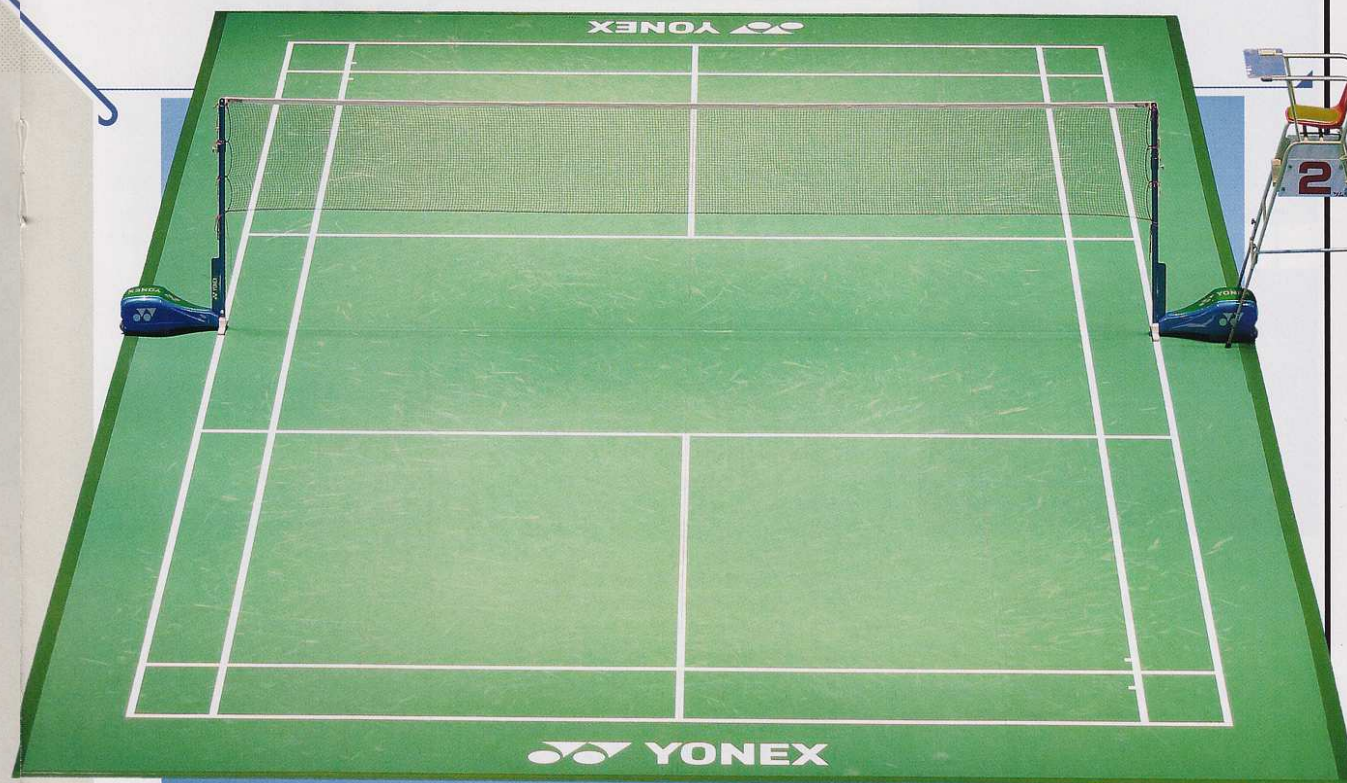


五輪の舞台を足元から支える

選手たちのハイレベルな戦いを足元から支えるのが、ヨネックスのコートマットだ。その歴史と特徴、そして五輪の舞台ができあがるまでの裏側に迫る。



五輪の舞台裏

Did you know?

最高峰の舞台はこうして設営される

東京2020と同じコートマットを使用して開催された「ダイハツ・ヨネックスジャパンオープン2019」。ここでは、特別にコート設営の様を初公開。五輪でも同様に最高峰の舞台がつくれる。

ヨネックス

コートマットの特徴

コートマットは主に3層の構造になっていて、ホリ塩化ビニルという素材を使用。この軟質素材が適度なグリップ力とクッション性を実現する。また、軟質素材には巻き癖がとれやすいという特徴もあり、収納する、また広げて使用するという繰り返しが可能なのも長所の一つでもある。海外製のコートマットは一般的に常設使用であることを考えると、持ち運びがしやすく、耐久性という部分でも優れているのがヨネックスコートマットの特徴だ。

「実際に素材を触ってみると、違いが明らかです。軟らかいだけでなく、クッション性があり、表面が滑りにくいように加工されているのに、素材自体は適度なめらかさがある。小中学生にとってコートマットでプレーするのはあこがれですが、床での足運びとは全然違うものも求められる。このグリップ力と、うまくスライドさせるフットワーク、クッション性を生かした足運びが必要で、トップ選手ほどそれをうまく使います。グレード1の大会やツアー大会で使用されているコートですから、選手たちは安心してプレーできるはずです」

— 池田信太郎



ヨネックスのコートマットの軟らかさを確かめる池田氏



3 4枚で1面になるように、ラインはあらかじめペイントされている

2 それぞれ端を引っ張りながら適切な場所に敷いていく

1 持ち運びができるのは、軟質素材ならではの。1面で1枚ではなく、4つに分けられたものが筒状に丸めて保管され、その状態で体育館に運ばれてくる。この状態でコートが敷かれる場所に移動



4 床上にマークされた正しい場所にコートが敷けるように調整



5 4枚に分けられたコートは、ファスナーで繋がられて1面に



7 床とコートの端をテープで固定。剥がれることがないように貼る



6 弛みがないように、しっかり空気を抜いて床に密着させる



8 体育館に敷かれた1面のコートマット。境目はわからない

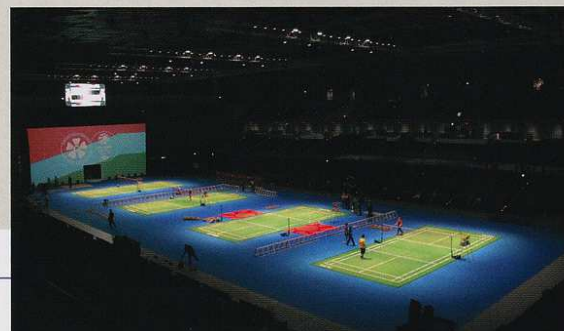


9 ここからは装飾もスタート。コートと床の段差ができないように装飾する



10 ネットの支柱や審判台をセット。ネットを張ってコート完成!

ここからコート間のボードなどを設置して、本格的な装飾も施される



バドミントンがオリンピック競技となったときから、その最高の舞台をまさに足元から支えてきたのがヨネックスのコートマットだ。現在、BWF(世界バドミントン連盟)は、ステイブルカップ(男女混合国別対抗戦)、トマス杯/ユバ杯(男女国別対抗戦)、世界選手権という最高のグレード1の大会でヨネックスのコートマットを使用。2020年の東京五輪の舞台でも使用されることが決定している。

そもそもコートマットの大きな役割は、安全性にある。木製の床では汗やほこりで足が滑りやすくなるが、その点、コートマットはそのリスクを減らすことができ、さらに適度なクッション性で選手のパフォーマンスを向上させる。元オリンピックの池田信太郎氏はコートマットを使用することによるメリットについて「止まりたいときにしっかり止まるだけでなく、少し遠いところに脚を出すときに、適度に滑らかにスライドする。視覚的にシャトルが見やすいというメリットもありますし、落ちるギリギリのところまで倒れながらも取りにいけるのは安心感があるからこそ」と元トッププ

レーヤーならではの目線で語る。ヨネックスのコートマットの大きな特徴は、適度なグリップ力とクッション性だ。これについて、ヨネックス製品開発部の太田慎二氏は「硬質塩化ビニルという硬い素材を使っている海外製に対して、ヨネックスのコートマットは軟質塩化ビニルという軟質素材を使っているから」とその秘密を語る。反発性に関しては、シューズのクッションが衝撃吸収と反発性を両立することで蹴り出しを速くすると同様、コートマットも反発性があることで足の動き出しがスムーズになり、選手のパフォーマンスもアップすると考えられる。「確かに、ネット前に踏み込んで戻るとき、ジャンプしたあとの動作などで反発性があるから動きやすさを感じる」と池田氏も大きく頷く。

ヨネックスのコートマットが最初に使われたのは1979年にインドネシアで開催されたトマス杯。40年間もの長きにわたり、世界のトッププレーを支えてきたコートマットが、2020年、世界が目にするハイレベルな戦いを東京で演出する。

